

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 126

戦前戦中の伊吹山学校登山

―戦争に利用された伊吹山―

近代登山の始まり

例年になく雪が少なく、晴天の土日には、各地から伊吹山を訪れる登山客が増えています。冬の山頂からの眺望は格別だそうです。夏のような騒々しさはなく、琵琶湖を眼下にすると、その先には八幡山や沖島、遠く比叡山が眺められます。南には霊仙、鈴鹿の山並みが連なり、その東に養老山脈、はるか向こうが伊勢湾。木曾・長良・揖斐三川の濃尾平野のほぼ東に金華山。さらに向こうは遠く恵那の山々となり、北には御嶽、乗鞍などアルプスの山々が眺望できます。山頂から北へ続くのは北尾根の峰々と国見峠、時にはそのはるかかなたに能郷白山、さらに白山の頂を見ることができず。『日本百名山』の著者深田久弥も「登るに從い展^びてくる眺望」に心を奪われました。

明治になってヨーロッパから近代登山が伝わり、明治三八年（一九〇

五）、宣教師ウエストンらの影響で日本山岳会が生まれます。大正時代には山ブームが到来、「登山の大衆化」が始まります。登山口の上野では入山料を取り、希望者には案内人を付けました。大正六年（一九一七）の記録では登山者に一人五銭の登山券を発売し、学生・団体については無料、一般団体は半額、案内人を要する時は案内人一人に付き一円二〇銭となっております。登山道も整いはじめ、山小屋や、山頂には石の避難小屋が建てられました。夕方から登りはじめて頂上で御来光を拝す夜間登山で知られるようになります。

対山館の書簡から

「対山館」は、大正一四年に上野に設立された、タイル張りの百草風呂を売り物にした旅館です。伊吹山文化資料館に保管されている対山館宛の書簡類や、当時の学校の交友会誌から、戦前・戦中の学校登山のよ

うすを紹介します。

「一一時が近づいた時、私達はあたりの静寂を破って宿を立った。（中略）登山者の群れは多かった。山はまるでお祭り気分だった」昭和四年（一九二九）大垣高等女学校交友会誌。

彦根高等女学校（現県立彦根西高等学校）は、明治一九年（一八八六）創立の全国的にも古い女学校で、大正三年七月二九日・三〇日に第一回伊吹登山を実施しています。校長以下職員五人は生徒一二人を引率して山麓の春照に一泊して夜間登山をおこないました。以後、大正七年、昭和二年、一〇年から一八年まで、終業式終了後、第五学年百数十名が恒例の夜間登山をおこないました。対山館の資料から、伊吹山には夏休みが始まる七月下旬に、愛知・岐阜・三重・滋賀・京都・大阪・兵庫各府県の学校が訪れています。そのほとんどが夜間登山です。

学校登山は、当初、野外学習や夏休みの有効な利用法として導入されましたが、日中戦争（昭和一二年）が勃発すると、戦争遂行のための「心身鍛錬」や「忠君愛国」の目的に変容していきます。やがて、旧制中学校などの男子生徒は、軍要員となるべく軍隊宿泊訓練などに明け暮れ、登山の主役は、銃後を守る婦女

子の心身鍛錬等を目的とした高等女学校になっていきました。伊吹登山が戦争に利用されたのです。

最寄の近江長岡駅はいち早く明治二二年に開業しており、交通が便利なことから、古くから多くの学校が学年単位で訪れ、それを受け入れる登山環境も充実していました。伊吹山は、夜間登山を中心にいまでは想像できないほど、多くの登山者で賑わっていたのです。

（歴史文化財保護課）



▲愛知高等女学校の伊吹登山（昭和初期か）